

## 『くまもとの戦争遺産 戦後75年平和を祈って』 第42回熊日出版文化賞受賞のお礼

この度『くまもとの戦争遺産 戦後75年 平和を祈って』が、「第42回熊日出版文化賞」受賞の栄誉を受けることができましたこと、調査にご支援いただきました多くの方々は勿論のこと、平和希求への思いを重ね合う皆様方に心からお礼を申し上げます。

2020年はアジア・太平洋戦争が終結して「節目となる75年」でした。

また、私がいま住んでおります「玉名」で小さな市民グループ「玉名荒尾の戦争遺跡をつたえるネットワーク」を発足させて、15年目の年でもありました。県文化課の行政職から学校現場へ異動し、大浜飛行場や荒尾二造の戦争遺跡と向き合う事となりました。

さて、本書は10年前に「熊本の戦争遺跡研究会」の仲間と作った『熊本の戦争遺跡』を基盤としています。

ただ、この10年間で県内の戦争遺跡調査は格段に進歩し、様相は一変しました。

本書では戦争遺跡を中心とし、できる限り正確で客観性を持った歴史資料を「くまもとの戦争遺産」としてとりまとめました。

これらのものは、残された近現代遺跡等を戦跡考古学の手法で記録・検証し、他にも空襲資料等の多様な戦時資料もその対象としました。熊本の地で、とりわけ若い世代が「戦争の実相」を学び、平和継続のための「基礎資料」となるよう心がけました。

例えば戦争遺跡調査では、大江の「歩兵第十三聯隊正門図等」はオルソ図での作成、熊本地震で被災した「隈庄飛行場油倉庫」は3Dデジタル測量で作成を、戸島町の元プロゴルファー古閑美保さんの実家横で発見された「健軍飛行場戸島無蓋掩体壕」はドローンで空撮するなど、新たな方法で調査を重ねてきました。

戦時資料もしかりです。日本で唯一残され八代で発見された「海軍艦上爆撃機“流星”風防」の検証は日本航空協会と、熊本市下無田神社横で発見された不発弾「M76落下傘付き焼夷弾」の復原は日本軍装研究会と、陸軍第二十七振武隊員として沖縄に特攻出撃された「原田葉さんの絶筆等」の資料調査は知覧特攻平和会館と、さらには敗戦間際の「県内飛行場の米軍空撮写真」は空襲・戦災を記録する会全国連絡会議・米軍資料検討会との連携を経て、本書に掲載しました。

昨年夏に報道公開した、熊本の市街地が写された「第2回熊本大空襲での13枚写真の発見」や、戦後に菊池恵楓園などが撮影された「米海兵隊16<sup>mm</sup>映像フィルム」は、ぎりぎりでしたが何とか掲載に間に合いました。

特に、本書では戦時中の俘虜問題について、POW研究会の古牧昭三さんに、現状をご報告いただきました。これまで語られてこなかった熊本での「俘虜労働の事実」を語り、そこに関わった人々の姿を描いていただきました。

ただ、健軍・三郎塚にあった熊本収容所の場所特定では、最後まで意見が合いませんでした。

そして、この調査連携は、敗戦の年8月7日、旧鏡町の鏡川河口に墜落した沖縄極東航空軍B25米兵5名が、敗戦の15日に福岡市油山で処刑された「西部軍事件」での検証作業へと、現在もつながっています。8月を目処に紹介の予定です。

2019年8月、熊本の地で念願だった「第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム」を全国から延べ430人の方々においでいただき開催ができました。全国の皆様方からは、熊本地震からの復興の現状を見ていただき「熊本の戦争遺跡の課題」を示していただきました。

例えば福岡県で昨年度刊行された「県内戦争遺跡の悉皆調査」を熊本で行政と連携しどう進めるのか、宮崎県HPで公開されている「宮崎の戦争記録継承館」でのネット公開を、熊本でも工夫し紹介できないのか、さらには全国で進む「次世代の平和を担う子ども達・若者達」への体験的取り組みはどうあるべきなのか、等です。

これから熊本で取り組むべき「小さなヒント」を、本書では散りばめました。

この様に「未来に継承する戦争遺産」としていったんは本書に記録としてまとめました。富田委員からも書評で指摘いただいた様に、これからは近現代考古学・戦跡考古学の視点で、戦争遺跡・遺構の調査・検証をさらに行います。

そして一人よがりの歴史観、思い込み資料調査ではなく、多くの方々と関わりながら「歴史の加害・被害からの客観的検証」を進めていきます。「次世代へ伝える活動」を丁寧に進めていきたいと思えます。

ご支援を頂きました多くの皆様方にお礼を申し上げます。